

Title	センターを去るにあたり
Author(s)	関谷, 全
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1983, 50, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/65571">https://hdl.handle.net/11094/65571</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## センターを去るにあたり

大阪大学工学部 関 谷 全

本センターの7月の運営委員会・協議委員会は、次期センター長（8月21日から）として、産業科学研究所 小泉光恵教授を選出いたしました。

私の2期4年間に亘るセンター生活は、随分永く感じられましたが大過なく終ることのできましたのは、偏に、センター各位のご協力と運営委員会、各種委員会、地区協、研究開発等を通じて内外からセンターを盛り立てて下さいました先生方、プログラム相談員、指導員としてご助力を頂いた方々の支持によるものと厚く感謝致しております。

当初、本センターの計算機の処理能力は上昇に向っていたとはいえ、他センターに流れる大型ジョブが可成りあり、それを本センターに呼び戻すための努力が必要でした。それにはメーカーに一刻も早く他機種に劣らぬ演算速度のものを作らすことでした。

幸い、NECの努力によりACOS システム1000が1年半ほど前に持ち込まれ、幾つかの困難を乗り越えて現在に至りました。

その間、いまだに完全ではありませんが、大学側のかかえる問題にメーカーが即応できる態勢を整えさせるのにかなりの努力をしてきました。

これからは汎用機の汎用性の故に、肝心の大学研究者の要望にぴったり合うように機械ができていない傾向が現れるので、ますますユーザの要望を取り入れた機械を作らすこと、これは特にスーパーコンピュータの時代になればいえることと思います。

それ故、各方面からの要望が積極的にセンターに寄せられることが必要です。私も今後とも、研究室にあっても原子力の大型計算とは縁が切れませんので、そのような方向から微力ながらセンターへ寄与できたらと考えております。

大型計算機センターの在り方が真剣に再考されつつある折、センターを去ることの責任を感じておりますが、帝大時代からの大きな学問の中心となった場所に大型計算機センターが置かれ、大きな計算機のゼロ号機を、大学ユーザの持ち込む多面的且過重な負荷の元でテストし実用化してゆく態勢が、現在の国産機を世界水準に持ち上げたと言えます。更にネットワークを通じ、7つの大型計算機センターがセンター群として相補的に機能し合うことにより、世界でも類を見ないものとなりうることに各方面からのご理解とご支持を賜りますよう、お願いしておきますとともに、皆様方の益々の御発展をお祈り致します。